

「やまひめに」類鷹百首の伝本について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23761

「やまひめに」類鷹百首の伝本について

山本 一

A bibliographic Study on YAMAHIMENI-Group-TAKA-HYAKUSYU

Hayime YAMAMOTO

はじめに

本稿は、鷹道（鷹狩りに関する技術や知識の伝承形態）に関わりを持つ和歌形式の文献群（通常、注釈を伴う）、「鷹歌」についての、基礎的な研究の一部である。

まず、「やまひめに」類の鷹歌とは何かについて、拙稿「鷹百首類伝本概観の試み」（国文学研究資料館文献資料部「調査研究報告」第18号、1997年6月）の当該類についての項を引用して確認しておく（所蔵者名称は発表時のままとし、必要な訂正は本稿の後の考察の中で加える）。

「やまひめに」類（西園寺鷹百首別本）

「山姫にぬさたて初むる野され鷹手をはなつとも我は忘れじ」を巻頭歌とする百首歌の類。管見に入った本はいずれも「西園寺」「西園寺太政大臣」などの作者名を持つ。この類の存在は従来あまり注意されて来なかったようであるが、群書類従や寛永版本により流布しているいわゆる「西園寺公鷹百首」（次項「たかやまに」類）とは全くの別本である。現在までにこの類であることを確認し得た伝本として、次のものが

ある。

○神宮文庫（3—1288）本（国文学研究資料館マイク
ロ番号 34/144/17、同紙焼番号 C4715）「近世初期写、藤原中
納言」の本奥書】

○島原図書館松平文庫（86—40）本「近世初期後半写、
藤原中納言」（神宮本と同じ）の本奥書】

○高松宮本（国文学研究資料館マイク番号 21-12/17-2、
同紙焼番号 C394）「慶長五年六月「吉岡入道兼庵」本奥書、
「名所百首和歌」と合写】

○静嘉堂文庫（30—21）本「近世初期写、外題「鷹歌
集」、「あらたまの」類ほかと合写】

○矢口丹波記念文庫（0102）本（国文学研究資料館マ
イクロ番号ヤ 8-29/5、同紙焼番号 C10835）「中河大和守所持
本書写の奥書、「鷹之字」ほかと合写】

ともに有注本で、歌順の多少の前後や歌または注の欠脱と
いった小さな異同は、恋部を中心にいくらか認められるが、
基本的には四本とも同系統と見られる。春・夏・秋・冬・恋
各二十首に部立され、それぞれ部立にかなった内容の歌が配
列されており、形態上「たかやまに」類よりも整然としてい

る。目安として、矢口丹波記念文庫本により巻頭部分を示す。

鷹百首和哥

西園寺大政大臣

春部二十首

山姫にぬさたて初る野され鷹手をはなつ共我は忘し

山姫とは山神なりぬさとは木の枝など

に手向てさして出る也野されは春のこと也

なお、「あらたまの」類（いわゆる定家三百首）とこの類の歌を両方取り込んだ鷹歌類が存在することは、後に触れる。

右の拙稿（便宜上、以下拙稿Aとする）発表後、知り得た伝本に次のものがある。

○肥前嶋原松平文庫蔵「鷹和歌集」（分類番号八六一三七）所収本。同本の中に四箇所に分散して「やまひめに」類の一部の歌が分散している。他本にある部立や注文の存在の痕跡は認められない。詳しくは拙稿「鷹歌文献序説―肥前嶋原松平文庫蔵「鷹和歌集」「鷹百首」の検討を中心に―」（『研究と資料』第五十六輯 2006年12月）「拙稿Dとする」に述べている。拙稿Aで紹介済みの、同文庫所蔵本（分類番号八六一四〇）は完本の「やまひめに」類を単独で収める本で、別個の伝本である。なお、所蔵者名は、拙稿Aではそれまでの慣例に依った。所蔵者の意向により、「肥前嶋原松平文庫」と改めるが、所蔵関係したいに変更はない。

○慶應義塾大学図書館蔵本。拙稿A発表後に佐々木孝弘氏より教示。拙稿A紹介の「高松宮本」（正確には国立歴史民俗博物館蔵高松宮本）の親本かと推測される。

○立命館大学図書館西園寺文庫蔵本「鷹二関スル記録」（園架番号195）下巻「鷹百首和哥」。拙稿A発表後に二本松泰子氏より教示。

○名古屋市蓬左文庫蔵本。国文学研究資料館にマイクロフィルムが収蔵されている（48.1274）が、拙稿Aにおいて見落としていたもの。拙稿「名古屋市蓬左文庫蔵「鷹百首和歌」」（『解題・翻刻』）所収は片桐洋一編「王朝文学の本質と変容 韻文編」2001年 和泉書院）「拙稿C」において存在と書誌の概要を報告した。

なお、拙稿A紹介済みの静嘉堂文庫蔵（30-21）「鷹歌集」についても、構成の全体について「鷹歌をめぐる二、三の考察」（所収は『日本文学史論―島津忠夫先生古稀記念論集―』1997年、世界思想社）「拙稿B」において多少の補足をしている。

このように、いくらかの知見を加えることができたが、この類が西園寺家の大臣の名を冠するもうひとつの鷹百首（「たかやまに」類）と別本であることが、長く認識されなかったため、目録などの掲載書名からは特定できない伝本がまだ各地に所蔵されていると思われる。また、確認した伝本についても、なお調査が十分ではないものがある。しかし、この分野の研究の進展という観点から見て、いたずらに完備を期して報告を遅らせるよりも、現時点での知見を整理し、諸賢のご批正を蒙ることに意味があるのではないかと考える。

「やまひめに」類の目立った特徴は、四季と恋の五部に部立され、一見すると鷹歌ではない一般の百首歌のような外形を持つ点である。言うまでもなく、いわゆる定家三百首（「あらたまの」類）や後京極三百首（「たつはるの」類）も同じ部立である。ただし、これらの二つの鷹定数歌は、江戸初期以前の写本や具体的な伝来奥書を持つ本がほとんど確認できない。もとより調査途上での暫定的見通しに過ぎないが、「やまひめに」類が「あらたまに」「たつはるの」両類より先行した可能性もある。西園寺家の人物に関係づけられる点で共通する「たかやまに」類と「かすめども」類

がいずれも部立のない無題百首の形態を持つこととの関係で、「やまひめに」類がどのような経緯で成立してきたかに注目することは、いづれにせよ重要であるように思われる。そのためには、本文内容（鷹歌本文および注）の詳細な検討も不可欠であるが、それについては現在、別に翻刻および注釈を準備中であるのでそれに譲り、本稿ではいくつかの伝本の検討を中心に述べたい。

有注の鷹定数歌は、その性格上、書写者の関心に基づいて書写されている場合が多い。それはどのような文献でも同じではないかと言われるかもしれないが、一般的に文献研究の対象となる文学作品や歴史記録においては、親本の情報内容を忠実に再現しようとする意図で書写が行われる場合が多く、細かな異同の比較から伝本系統をたどる、いわゆる原典遡及の方法は、そのような転写過程を経た伝本の存在を前提としている。しかし、鷹定数歌のような文献では、この方法の有効性は限定的である。もちろん、個々の伝本の間に直接または間接の転写関係が推定されるかどうかは、伝本整理の上で重要である。また、歌順の比較等により、伝本間の親疎にある程度の見通しを得ることも可能である。ただし、繰り返しになるが、このような方法で単一の「共通祖本」へ遡ることは、現段階ではあまり期待できないし、またそのような研究によつて文献の性格が解明できるかどうかも疑わしい。本稿では、いくつかの伝本の個別的な性格に関して現在まで知り得た情報を整理し、これらの積み重ねの上に、「やまひめに」類鷹百首の文献群としての性格を考えてみたいと思うのである。現段階では、いきなり成立の問題に遡るよりも、伝来状況を押さえていくことが重要であり、そこから間接的にせよこの類の特色も見えてくるのではないかと思う。

1 矢口丹波記念文庫蔵本

本稿での略称を「矢口本」とする。原本調査をなし得ていないため、正確な寸法、装丁等、書写年代は明らかではないが、国文学研究資料館蔵マイクロフィルム紙焼写真によれば、表紙の縦は約二十五・五センチの袋綴一冊で、外題は付されていないようである。「やまひめに」類の内題は「鷹百首和歌」で作者名は「西園寺太政大臣」。「やまひめに」類の後に、次に述べるような二種の文献を合写している。すなわち、墨付十五丁の裏から同十六丁の裏までが、「鷹之字」（内題）であり、鷹に関する漢字および漢字熟語に片仮名で訓や簡単な注を付けたものが五十一項にわたり記された後に、奥書がある（後に検討）。この部分は、鷹道に関する伝書の内容となるもので、鷹書と見なされる。次に、墨付十七丁表に「言宮抄之略書」の内題があり、

一 夜わたる月 よひよりあくるまで也

以下、墨付十九丁表まで四十一項にわたつて歌語の注が列挙されている。その後に、

此外いかほとも侍れどもしれる事はしるさすとそとあり、文字通りに解すると『言宮抄』（内容から見て歌書であることは疑えないが、現在、一般的に知られている書目ではない）から必要に応じて抄出したものと見なされる。さらに、墨付十九丁裏から二十丁表までにも記事があるが、これについては後述する。

このように、この本の書写状態は、和歌に対する関心と鷹道に対する関心の重なりを示している。もとより、鷹定数歌という作品形態の存在そのものが、このような関心の重なりを示唆するものではあるが、ここにはそうした一般的可能性にとどまらない具体的な接点が見られる点で興味深いと言えよう。この点を踏まえ

て、三種の文献の後に記された奥書や、追記風の文言を検討しておこう。

まず、墨付十五丁表の「鷹百首和歌」の奥書である。

右此百首於鷹狩之道可秘之第一也

然間心あらはにしるす事只子孫為傳也

深懷中ニして猶他人之前ニ一首と云

共努々不可説之次第作意之者也

関東第一鷹上手越後中河大和守

所持之本 屋形様進上之時写之

このうち四行目までは名古屋市蓬左文庫蔵本に同様の奥書、その部分の末尾七字を除く部分は神宮文庫本・肥前嶋原松平文庫本のグループに、さらに二行目までは国立歴史民俗博物館蔵高松宮本・慶應義塾大学図書館本のグループにほぼ同様の奥書がある。

このように転写の状態はまちまちであるが、内容から見れば、四行目までを一連の文言とみなしてよいと思われる。試みに訓読すれば、

右、この百首は、鷹狩の道において、秘すべきの第一なり。

然る間、心あらはに記す事、ただ子孫に伝へんがためなり。

深く懷中にして、なほ他人の前に一首といへどもゆめゆめこれを説くべからず。次第、作意のものなり。

これは有注本形態の伝本の成立を説明するものであり、「やまひめに」類そのものの成立に関係する可能性を持つと言えよう。しかし、書きぶりはありふれたものに過ぎず、いまのところ成立に関する具体的情報を与えるものとは言えない。

これに対し、後の二行は矢口本に至る伝来に関わる情報と見られる。残念ながら年次の記載がなく、「越後中河大和守」「屋形様」の指す人物についても今のところ特定し得ないが、他の伝本の奥書類よりも具体的情報を含み、注目される。この奥書は墨付十六

丁裏の「鷹之字」奥書（および追記風の文言）とも併せて検討すべきものであろう。一部、判読困難な箇所があるが、以下に翻字を掲げる。

宇都宮御天書自権大夫方穴戸左近将監

相伝之本写之

鴉カク 老子経曰 鷲鳥合トモ百不如一鴉

猶當分之事（？）鷹之哥彼文字写之

「宇都宮御天書」については、鷹道に関わり深い下野国宇都宮社との関係が推測される。「権大夫方穴戸左近将監」は特定し得ないが、この人物から相伝した本が矢口本の祖本と見なされる。ところで、「鴉」に関する説明は、内容から見て「鷹之字」に関する注記で、転写の際に奥書の中に入り込んでしまったものかと思われる。そうであるなら、最終行に「鷹之哥彼文字」とあるのは、「鷹の歌」と「鷹の文字」すなわちここまでの部分に写されている「鷹百首和歌」と「鷹之字」を指すことになろう。判読に誤りがなければ、「越後中河大和守」等の関与した「鷹百首和歌」に、「鷹之字」を加えた形態の本を「権大夫方穴戸左近将監」が相伝していたことになり、矢口本に至る伝来の経緯が示されていることになる。

次に、墨付十九丁裏からの「言宮抄之略書」の追記についても、考えておく必要がある。

日の本の山てふ山にかくる巢に白鷹の子のなとなるらん
之は日本ニ白鷹の父母と□□とあるましと也

つこの国のつゝみのたきの花ちりて一葉のみちまふに見へけり

常光院殿御本写畢

いともかしこきとは花（傍記・鳥とも）おそれなり云心也
かゝらすもかなとは かくあらずもかなと云心也

秋は居 秋の行心也 秋はいぬとよめり
 やよやまて 待 夜に待と云心也
 やよ時雨 弥重 何も同心也

この箇所にも判読に苦しむ文字があり、追記の性格を十分明瞭にできない。しかしながら、最初の二行が鷹道もしくは鷹歌に関わり、他の部分は和歌の知識に関わるので、この伝本全体が、鷹道の知識と和歌および連歌の知識が重なり合うような性格を持つことを窺わせる。さらに注意されるのが「常光院殿御本」という奥書であつて、これが「言官抄」の抜き書きにどう係っているのかは即断できないが、常光院すなわち室町時代の歌人堯孝（もしくは常光院を継いだ堯憲）の書写本または所持本が、間接的にせよこの伝本と関係を持つ可能性を示すのである。

このように矢口本には、「やまひめに」類の伝来・享受の環境に関するさまざまな興味深い情報が含まれている。しかし、この本単独では、それらの意味を十分解明できないことも事実である。今後、さらに関連する資料が見いだされることを期待したいところである。なお、この本を伝える矢口家は、『群馬県史』『高崎市史』および高崎市ホームページ等によれば、代々、高崎市八幡人幡宮の神職を勤めてきた家柄とのことである。出来るだけ早い時期に、原本調査の許しを得て現地を訪問する機会を得たいと願っている。

2 慶應義塾大学図書館蔵本

この本も原本未見のため、詳細な点は確認し得ていないが、列帖装一冊に「名所百首和歌」と「やまひめに」類を合写しており、「やまひめに」類の外題は「詠鷹百首和歌」、作者名は「西園寺太政大臣」である。表紙題箋には「名所百首和歌」「鷹百首」の外題

を横に並べて記す。第一丁表左上方にも「鷹百首」「名所百首和歌」と並べて記すが、本文とは別筆、またこの面には四行の茶道に関するらしい記事がある。二丁表より「名所百首和歌」本文が始まるが、その内容は、通常和歌研究において名所百首と呼ばれるような、名所歌枕を詠み込んだ和歌作品とは全く異なる。冒頭二行を示せば、

一山城や賀茂の上山日影山片岡たす貴船山科
 山城は木幡音羽に笠取や岩田宇治川槇の嶋山

のように、歌枕名所の地名のみを歌の形に詠み連ねた、「名所尽くし歌」と呼ぶべきものである。第八丁表でこの本文が終わり、第九丁表から「やまひめに」類が書写され、末尾に次の奥書がある。

右此百首於鷹狩之道可秘之第一也然間

頭記事子孫二傳□（一字判読困難）之儀也

慶長五（子戊）年六月念三事之持主 吉岡入道 棄庵写（花押）
 奥書のはじめの二行は、他の「やまひめに」類に付されていたものと同一内容の一部分であり、「やまひめに」類のみに係る。最後の慶長の奥書はこの本全体に係るものと見られる。以上の書写内容と奥書は、拙稿Aで国文学研究資料館マイクロフィルムにより紹介した高松宮本と一致する。高松宮本が慶応大学本の転写本ではないかと思われる。

現段階では、棄庵の素性をはじめ、これらの本について具体的に明らかにできない点が多い。合写されている「名所百首和歌」が、通常の和歌ではなく、記憶の便宜のために作られた覚え歌とも言うべきものであることは、仮に棄庵が同一ジャンルの作品を合写する意識を持っていたとすれば、鷹歌の「教訓歌」としての受容（かつて井上宗雄氏が指摘された）を示す資料となる可能性がある。一方で、名所の知識を必要とするのが連歌師であると考えられるならば、鷹歌と連歌の接点を示す資料ともなる可能性

がある。しかし現段階では、具体的な情報が不十分で、これ以上考察を進めることはできない。

3 立命館大学図書館西園寺文庫蔵本

本稿での略称を「西園寺文庫本」とする。縦19・5センチ横13・5センチの袋綴一冊。薄茶色無地の表紙は後の装丁で、左上に第箋を貼るが文字は記さず、他にも外題は記入されていない。整理番号05825、目録に掲載される「鷹二関スル記録」は現蔵者の整理書名である。内容は二つの文献の合写と見られ、そのうち後半が「やまひめに」類である。一面9行の匡郭界線のある同一の料紙に書写され、全巻一筆かどうかは即断しかねるが、同時期に書写されている。書写奥書はないが、近世末期の写かと見られる。

前半（墨付一丁表から二十丁表まで）は、仁徳天皇の治世に鷹かが伝来したことから始めて、鷹道の知識の条々を記す鷹書であり、末尾（墨付二十丁表）に

寛永十七年 八月吉日

の奥書があり、二十丁裏は白紙、二十一丁表に「宇都宮社頭納鷹文拔書秘伝」という内題書名とおぼしき記載と、左上に「下」の字があり、二十一丁裏は白紙、二十二丁表から「やまひめに」類を写している。なお、奥書より前の本文の途中の十七丁表に「宇都宮平野代々秘書」の注記がある。これは直前の項目（鷹名字）に係るとも、それまでの全文に係るとも定めたいが、内題書名との関連で注意される。

「やまひめに」類は、「鷹百首和歌」の内題に作者名を「西園寺太政大臣」として、本文の末尾（墨付四十二丁裏）には、次のような奥書がある。

于時文禄四年乙十二月拾一日

下野国宇都宮二而鷹文秘伝

之内得事及御傳御哥移候愚道

三行目の「得」以下は明解を得ない。私の判読に誤りがあるか、もしくは転写過程での誤写が考えられる。しかし、書きぶりからこの写本一冊の全体に係る奥書と見なされる。さらに四十三丁表には次の奥書がある。

右写所

寛永拾七年 北野 藤原朝臣

八月吉日 十河末次

「北野藤原朝臣」「十河末次」については不明であるが、前者が寛永の書写に関わり、後者はその後の転写に関わるのであろうか。これは、前半末尾（墨付二十二丁表）の奥書と照応するものであり、前半の鷹書と後半の「やまひめに」類が寛永十七年に一具で写されたことを示している（寛永時点では二冊本であった可能性もある）。

これに関して注目されるのは、同じ西園寺文庫に納める「鷹百首和歌」（たかやまに）類有注本の伝本、整理番号05836）が、特徴的な匡郭界線のある同一の料紙に書写されていることである。二つの写本が、西園寺公望公爵に所蔵された時点で、一組であったことは間違いない。それ以上は想像であるが、おそらくはさらに数点の鷹道関係書籍をまとめて写した数冊一組の書物が散逸し、そのうち二点が公爵家の所蔵に帰したものではなからうか。ただし、05836の本には寛永の奥書は見られないので、この書写作業が寛永の親本の時点まで遡るかどうかは何とも言えない。

この伝本に最初に着目した二本松泰子氏は「宇都宮社頭納鷹文拔書秘伝」を前半部分の鷹書の書名と見なしたが（補注参照）、内題書名の位置や文禄の奥書を考慮すると、「やまひめに」類を含む

全体が「宇都宮社頭納鷹文拔書秘伝」と呼ばれているようである。

文禄奥書には前述のように不明確な点があるが、ほぼ確実な部分の記述からも、文禄四年（一五九五）十二月十一日に下野宇都宮に伝わった「鷹文秘伝」から一部を抜粋書写したのが「宇都宮社頭納鷹文拔書秘伝」であることが見て取れる。この本では、「やまひめに」類の歌の頭にすべて「一」の字を入れており、和歌本文と注文の間での改行もなく、そのため一見すると前半の簡条書き（各項目の頭に「一」を入れる）と同じ書式で写されているように見える。このことも、両者が「宇都宮社頭納鷹文拔書秘伝」として一体のものであったことを示唆するようである。また、前述の同じ装丁・書式を持つが奥書は持たない整理番号0536の「たかやまに」類が、歌の頭に「一」を記さないことも、この書式が文禄の書写の時点まで遡る蓋然性を示す。なお、前半部分の鷹書の内題等が見えないのは不審であるが、墨付一丁から本文が開始される現状が、西園寺文庫本の本来の姿かどうかは断定できず（表紙が原装でない）と見られるため、内題や外題を記した冒頭丁が失われている可能性もある。また、寛永の書写以降の転写過程で、脱落した可能性も考えられるのである。

このように西園寺文庫本は、書写自体が新しいにもかかわらず、文禄および寛永の奥書を持つ点で注目される。特に、前述の慶応大学本の奥書の慶長を遡る文禄の奥書は、いまのところ「やまひめに」類そのものの成立下限を示す徴証となる。それと共に注意されるのは、文禄の時点で「やまひめに」類が宇都宮社に他の鷹書と共に伝来したとされることである。前述の矢口本の奥書に見える「宇都宮御天」と併せて、「やまひめに」類の伝来に、宇都宮社もしくは同地を基盤とする鷹道の流派である宇都宮流が関与した可能性を推測することができる。ただし、一般的に言って、伝書と流派との関係を固定的に考えたり、伝来の状況をただちに成

立に結びついたりすることには、慎重であるべきであろう。現時点では、知見の蓄積につとめることが先決なので、注意すべき情報であることのみ指摘しておく。

一方、本文内容について見ても、西園寺文庫本には注目される点がある。「やまひめに」類伝本間には、四季と恋に部立された各部立の中の歌順に、異同がある。西園寺文庫本の歌順は、矢口本や慶応大学本とは異なり、静嘉堂文庫蔵「鷹歌集」所収本（以下本稿では「静嘉堂文庫本」と略称）ときわめて近い歌順を持つ。ところが、注の本文に注目すると、現在までに知られている他の伝本の注には、語句の異同程度の差異しかないのに対して、西園寺文庫は異本と言うに近い独自異文を持っているのである。まず、春部冒頭の二首について、西園寺文庫本を掲げ、注本文を他本と対比してみる。

○西園寺文庫本

一 山姫にぬさたてまつるのされ鷹手おはなつともわれは忘れ
 じ 山姫とは山の神の事也 のされは春也 山の神にぬさお
 たてまつる祈念也 すれば のされたかなれ共われは忘れし
 とおもふ心なり 祝言にちなむ也

○静嘉堂文庫本

山姫にぬさたてそむる野されたかてをはなつ共我はわすれし
 やまひめ山の神なり ぬさ 木の枝と手向てにる（？）
 とをる心なり 野され 春の儀也

○西園寺文庫本

一手にあるゝさほ姫鷹の山かへり出んかりばの暮お待けり
 さほ姫鷹とは春三月の内にとる鷹也 心こわき物也 されは
 手にあるゝ間 暮お待てかりはへ出んとよめり 棹姫たか春
 也

○静嘉堂文庫本

てにあるゝさほ姫たかの山かへりいてむかり羽の暮をまちけり

さほひめたかはる也 てになるゝあひた くれをつめて
いつへきなり

注内容が全かけ離れているわけではないが、記述の順序や要素がかなり独自である。別の箇所から示すと、秋二十首の冒頭三首は、西園寺文庫本では

一打も(ママ)れて小鷹仮はの駒のあし一かたならてたつ鶉
かな 小鷹狩秋也 打むれてかり行に 鶉の数おほくたちた
るやう也

一御鷹かりすゞ吹風の空越ととたちに落る谷のならしは き
こえたる哥也

一ひとはかり鷹おすゑ野の朝露に翅ぬれてそ鳥そなくなる
一羽かりといふ事は 露深き比 ひとはかりしてやかて帰る
也 扱は末のゝ雉子の啼とよめり 鷹す(?)て帰るやう也
鷹おすへのといひかけたる也

のようであるが、静嘉堂文庫本では一首目と三首目には注文が記されない(矢口本では「心あきらかなり」、慶応大学本では「心あらはなり」「儀なし」等と記すが、実質的な注文がないことは同様である)。一方、西園寺文庫本では実質的な注文のない二首目は、他本では、

ならしとは たになどのふかきにおつる鳥を ならして
打かへりとふをいふ也(静嘉堂文庫本)

のような注を与えられている。はじめに述べたように、鷹定数歌では転写過程で本文の細かな異同が発生する場合は多いと考えられる。それにもかかわらず西園寺文庫本が注意されるのは、異同の程度が大きいだけでなく、伝本間の歌順の異同と注本文異同との間に連動が認められないからである。このことは、「やまひめに」

類の伝来において、歌順の異同の発生と注本文の異同の発生が、段階を別にしていた可能性を示している。具体的な経緯については展望し得る段階にはないが、文禄・慶長頃の時点までに、「やまひめに」類がある程度複雑な伝来過程をたどる程度に、流布していたことは確かである。

4 名古屋市蓬左文庫蔵本

本稿では略して蓬左文庫本とする。この伝本は紙幅二十一センチほどの大型の布表紙巻子本で、界線を施した厚手の料紙に、闊達な書体で書写されている。書写年次を示す奥書等はないが、近世初期後半の書写か。和歌は二行書き、注文は一行文にはいるよう小書きで行分けして記され、書風とも相まって見た目に非常に整然とした感じをあたえる。何らかの目的のためにあつらえて豪華な本を作成したものかと推測されるが、いまのところ具体的な事情は明らかにできない。強いて言えば、装丁や書風から見て、歌書としての意識で書写された可能性が高いように思われる。

— 奥書は、

右此百首ハ鷹狩之道

可秘第一也然心あらは

注事者只子孫に

傳えんか為也深懷中

して他人の前におゐて

一首といふとも努々不可

語之次第作者也

であり、前述の矢口本の奥書のはじめの四行と同一のものと見なされる。本文内容の点でも、蓬左文庫本は歌順等が矢口本に近い。ただし、小さな異同はかなりあつて、直接の転写関係は認められ

ない。

5 神宮文庫蔵本および肥前嶋原松平文庫蔵本

本稿での略称を神宮文庫本・松平文庫本とする。

神宮文庫本は縦二十七・八センチ横二十一・一センチの袋綴一冊。分類番号は一三七・一二八八。白地に亀甲文を刷った表紙にウチツケで「鷹百首 公経」と外題を記す。内題は「詠鷹百首和歌」、作者名は「西園寺太政大臣公経」である。書写奥書はないが、近世初期の書写と見られる。また、本の体裁や書風は歌書のものと思われ、「やまひめに」類の歌書としての享受を窺わせる。歌順は静嘉堂文庫本・西園寺文庫本に一致するが、注内容は西園寺文庫本とは異なり、静嘉堂文庫本を含む他の「やまひめに」類と共通する。一方、静嘉堂文庫本には「鷹歌集」全体にも、所収「やまひめに」類単独にも奥書の類はないが、神宮文庫本には矢口本・蓬左文庫本と一部重なる次の奥書がある。

右此百首於鷹狩之道可秘第一也然間あら

はにしるす事はたゞ子孫につたへんかため也

ふかく懐中して一首といふとも他人の前にて

努々不可語之

藤原中納言 在判

この署名の人物が特定できれば、「やまひめに」類の伝来に関する重要な情報になるが、類似の奥書を持つ矢口本や蓬左文庫本にこの署名がなく、また奥書末尾の「次第作者也」の文言を欠脱していると思われるなどの疑問があり、真偽を含めて慎重に考える必要がある。この神宮文庫本と近い関係にあると見られるのが松平文庫本である。

松平文庫本は分類番号が八六・四〇、縦二十七・三センチ横十

九・九センチの青色表紙袋綴一冊で、体裁・書風はこの文庫の大部分の蔵書が属する近世初期後半の書写写本群と共通する。外題は「西園寺鷹百首」、内題は「詠鷹百首和歌」、作者名は「西園寺太政大臣」で、神宮文庫本にある「公経」の文字はない。しかし、奥書は次のように神宮文庫本とほぼ一致する。

右此百首於鷹狩之道可秘第一也然間あ

らにしるすことは唯子孫つたへんかため也深

く懐中にして一首と云とも他人の前に

てゆめくかたるへからすく

藤原中納言 在判

神宮文庫本と松平文庫本については、本文の調査が十分でなく、二本間の細かな異同は把握できていないが、おそらくこの二本には共通の祖本が存在するのであろう。その本、もしくはそれに近い本が見いだされるならば、「藤原中納言」の署名の意味もますますし明らかになるかもしれない。現段階では、公家の関与、もしくは公家の関与を装う操作が感じられるというにとどまる。

おわりに

以上、いくつかの伝本について、やや詳しく述べてきた。「やまひめに」類が室町末期から近世初期頃までの間に、かなり多様な転写過程を持っていたことは示すことができたと思う。また、鷹道に関わる伝来と、連歌・和歌に関わっての伝来との、交差や重なりが窺える。ただし、もう一步の立ち入った考察を行うためには、関連する資料と情報のさらなる博搜が求められる。本稿を目にされた諸賢に、お気づきの点のご教示をお願いする次第である。

補注

二本松泰子氏「宇都宮流鷹書の実相——立命館大学図書館西園寺文庫蔵『宇都宮社頭納鷹文技書秘伝』をめぐって——」（『伝承文学研究』第五六号、2007年5月）

付記 1

貴重な伝本の調査・複写物提供等をお許しいただいた所蔵者各位に感謝申し上げます。また、伝本の所在等につきご教示いただいた各位、および立命館大学を会場に開催される「鷹書研究会」における報告、質疑、討議に際し、ご意見、ご教示いただいた各位に感謝申し上げます。

付記 2

本稿は科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号 20520189「鷹書類の調査と研究」、研究代表者立命館大学中本大教授）による研究成果の一部である。